



風が吹いたら



木下瞳子

一、夏の日

子機の通話ボタンを押すと、ランプが青から赤に変わり、発信音がします。メモした番号を押そうとして、どうしても手が震えて、子機を戻してしまいました。還暦をとうに過ぎて、あなたの前だとわたしは十代の少女に戻ってしまうようです。

ゆっくり深呼吸をしてからふたたび子機を持って、えいっと番号を押しました。呼び出し音も震えているように聞こえます。

相変わらず大冒険なんですわねえ、とあなたは笑うでしょうか。

*

あなたと出会った日のことは、よく覚えています。まだ戦火の気配はない七月終わりの暑い日で、蝉が鳴いていました。

夏休みに入り、お友達はみんな保養地へと出掛けてし

まったのに、我が家は毎年お祭祀が終わるまで東京に残っていないわけありませんでした。

あのときは初代が亡くなって百何十年だとか、大きな年数の年だったようで、普段は顔を合わせない遠くの親戚も集まっておりました。

写真を撮ろう、と言いつ出したのは、祖父でしたか父でしたか。とにかく予定のことではありませんでしたから、いつもお願いしている写真屋は別のお宅に呼ばれていて、断られてしまったようでした。そこで、家中の誰かが慌てて探して、よく知らない写真屋が呼ばれたのです。

その写真屋の先生に門生として付いてきたのがあなたでした。あのときはまだ十代でしたでしょうか。どこから借りてきたのか、着こんだ背広の肩幅は余っていました。伸びた髪には整髪料もつけていません。

「奥さま、もう少し顎を引いていただいて……そうですね。ありがとうございます。それから青いお着物のお嬢さまは、少しだけ右に……はい、ありがとうございます」

みなを並ばせ、カメラに収まるようにまとめるのはあなたの仕事でした。

商売人の多くがそうであるように、あなたは、おきれい

です、とか、素晴らしい、とかペラペラと音がしそうなお上手を朗らかに口にします。十歳になったばかりのわたしは、そんなあなたの声を、あくびを噛み殺しながら聞いておりました。

今みたいにクーラーなどない時代で、扇風機が淀んだ空気をかき混ぜていました。窓は開いているのに、そよとも風は入ってきません。あなたの首筋には玉の汗が光り、こめかみに髪の毛が張りついていました。

撮影が終わり、みんな食堂に移動しましたが、わたしはなぜだかあなたのが気になって、水を入れた麦湯を持って応接室へ戻りました。

あなたは、ひとり片付けに追われていました。その横顔に夏の日差しが差しかかっています。

煙草を吸っていた先生にコップをひとつ渡して、もうひとつのコップを持ってあなたの目の前にしゃがみました。あなたの真剣な眼差しは機材に向けられていて、わたしのことなんて目に入っていませんでした。そこでわたしは床に膝をつき、下から覗き込むようにして視線を合わせました。ふいに視界に入ったわたしに、あなたは驚いて尻餅をつきました。

「わあ、びっくりした」

そう言ってあなたが笑ったとき、窓から風が入ってきました。それまで一筋も吹かなかったのに、突然。わたしは、あなたが風を呼んだのだと思いました。

「どうぞ」

コップを差し出すと、水が音を立てました。

「あ！ 機材の上はだめ！」

目の前の鞆にあなたは覆いかぶさりました。今度驚いたのはわたしの方で、あなたの背広の袖に少しだけ麦湯をこぼしてしまいました。

「あ」

あなたは気にした素振りもせず、鞆を脇に寄せました。

「機材は濡れると壊れてしまうので」

「そんなこと知らなかったんだもの」

「そうですね。すみません」

ついに言えませんでした。あのとき謝るべきだったのはわたしの方でした。ごめんなさい。

あなたは肩で顔の汗を拭ってから、コップを受け取りました。

「ありがとうございます。いただきます」

ただの麦湯をととてもおいしそうな音を立てて飲み干していきます。上下に動く喉仏を、わたしはじっと見つめておりました。揚羽蝶の孵化を観察するみたいに。息をつめて。

やがて、氷がカシャンとコップの底を打ちました。

「ごちそうさまでした。おいしかったです」

また吹いた生ぬるい風が、あなたの前髪を巻き上げました。あなたの瞳は、軽井沢でいただいた珈琲ゼリーのような透き通った褐色でした。口に含んだらきつと、つるりとあまい。

わたしはまだ幼くて、他人との距離感がわかっていなかったのでしょうか。間近に見つめるわたしから、あなたは少し身体を引いて、濡れた口元を袖で拭きました。

「いただいておりますが、お嬢さまは僕なんかに構って大丈夫なのですか？」

これは普段なら女中のする仕事なのです。祖母が健在でしたら、きつく叱られたことでしょう。子爵家の跡取りとして、兄には家庭教師が付けられ、姉たちも厳しく育てられました。

ところが、昭和二年に十五銀行が休業して、我が家もそ

のあおりを受けました。加えて、父が友人の保証人となつてその債務をかぶつたのです。桶の継ぎ目から少しずつお水が漏れ出るように、我が家は力を失っておりまして。

そのため、末っ子のわたしには専任の御付きを付ける余裕もなく、手の空いた女中が交代で御付きの仕事をしています。わたしたちは目を離される時間が多かつたのです。

「みんなお祭祀で忙しいので」

「ああ、なるほど」

もし、我が家が以前のような経済状態であつたなら、わたしには始終厳しい御付きがついて、めつたに奥から出してもらふこともできず、あなたと口をきくこともなかつたと思います。

「ところで、伯母さまはわたしのお姉さまに見える？」

無責任なあなたは、伯母に「お嬢さまとご姉妹に見えます」と言ったことを、すぐには思い出せないようでした。何の話なのか少し考えて、それから特別な秘密を打ち明けるように人差し指を口に当てました。珈琲ゼリー色の目が細められます。

「お嬢さま。人というものは、心地よい嘘を好むものなの